

# 子どもと女性の健康相談室

43



福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター特任教授  
神保 正利氏

前回、妊婦は妊娠全期は普通のかぜと似ているため、インフルエンザと判断するのが難しいことがあります。もし、十二月から四月頃にかけてのインフルエンザ流行期の抗インフルエンザ薬の服用が、妊婦の場合、肺炎などを起こして重症化しやすいことも考慮してインフルエンザの治療薬であるオセルタミビル（商品名・タミフル）などにリレンザまたはタミフルの妊婦への投与による

います。

家族がインフルエンザにかかってしまった場合、同居する妊婦はインフルエンザの発症を予防するために抗インフルエンザウイルス薬を内服することができません。発症を予防できる期間は薬を内服している期間に限られますが、予防効果は100%ではありません。

# 抗インフル薬内服を

お話しします。

インフルエンザにかかると三八度以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、全身の倦怠感などの症状が突然現れ、その後、咳や鼻水などの症状が続いて約一週間で軽快します。しかし発症しても症

にこれらの症状が出現した場合にはインフルエンザを疑って症状が悪化する前に早めに医療機関を受診してください。

内服をお勧めします。症状の出現から四十八時間以内に服用を開始することにより、発熱期間は一〜二日短縮され、ウイルスの排出量も減少し、重症化を予防することができます。

また、投与の場合には有害事象は報告されておられません。また、授乳婦に抗インフルエンザウイルス薬を投与する場合、薬の添付文書には「授乳を避けさせること」との記載がありますが、母乳への移行は微量であるため、抗インフルエンザウイルス薬を使用しても授乳には支障ないとされて

必要や有益性を十分理解した上で服用するようにしてください。

## 妊婦のインフル発症

抗インフルエンザウイルス薬には日本では吸入薬であるザナミビル（商

品名・リレンザ）や内服薬であるオセルタミビル（商品名・タミフル）な

次回11月18日掲載